

# フィギュアスケート男子シングルにみる ジェンダー・クロッシング

—21世紀初頭のオリンピックにおけるパフォーマンスから—

相原 夕佳  
日本大学大学院総合社会情報研究科

## Gender-Crossing in Men's Single Figure Skating —Focused on Performances in Olympics in the Early 21<sup>st</sup> Century—

AIHARA Yuka  
Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

---

This study examines cross-gender performances in figure skating, focusing on men's single skating. In the 20th century, figure skating performances were gendered in accordance with conventional heterosexual values. This is an example of what Judith Butler called gender-performative situations. In the early 21st century, skaters such as Evgeni Plushenko and Johnny Weir are putting her "Gender Trouble" theory into practice through cross-gender performances.

---

### 1. 序論

本稿は、フィギュアスケート男子シングル競技におけるクロスジェンダー・パフォーマンス、すなわちジェンダーの境界を超越するパフォーマンスに焦点を当て、その重要性を提唱することを目的とする。

個々のスケーターのために創作されるプログラムを披露するフィギュアスケートは、パフォーミング・アーツの中でも独創性を発揮しやすい性質をもち、競技としての規定を満たすことを前提としても、多様な表現を生み出す可能性を秘めていると言える。しかし、その競技史を辿ると、アダムズ(Adams, Mary Louise)ならびにケストンバウム(Kestnbaum, Ellyn)らが指摘するように男女二極化の様相が濃厚であり、男子シングルには力強いスポーツ性、女子シングルには優美な芸術性が求められる傾向にあった。その結果、20世紀を通じて多様化どころか男女各々の理想モデルにステレオタイプ化していた時期が長い。

芸術とスポーツの融合であるフィギュアスケートは、スケーターたちのアスリートとしての卓越した身体能力と芸術性の高い表現力によって多くの観客に感動を与え、社会的にも影響を及ぼしてきた。し

かした、自由な表現を阻む様々なイデオロギー・バイアスが存在したことも事実である。そして、その中でも特に大きな抑圧を及ぼしたのは、社会が規定する男性性、女性性を表現することを要請するジェンダー・バイアスであろう。

こうした状況は、ミッシェル・フーコー(Foucault, Michel)が『知への意思 性の歴史 I』の第1章「我らヴィクトリア朝の人間」において論じた、ヴィクトリア朝の体制が規定した社会的イデオロギーの抑圧下にあった状況にまで遡る。フーコーが強調する「ヴィクトリア朝」の体制とは、子孫を生み出す異性愛以外のセクシュアリティを異端とみなし、男性性、女性性が際立っている状態を理想とする、異性愛至上主義の社会規範を意味する。フーコーはさらに、その規範が社会や文化のあらゆる面を抑圧していると指摘している。(9-22)

また、男女シングルスケータリングのパフォーマンスがそれぞれ社会的に奨励される男性像、女性像の理想美を再生産するかのようステレオタイプ化していく状況は、ジュディス・バトラー(Bulter, Judith)が『ジェンダー・トラブル』において暴き出

した、我々が日々社会の求めるジェンダー・ロールを遂行している状態と一致する。バトラーはさらに、こうしたジェンダー・パフォーマンスにおいて演じるジェンダー規範そのものが実態のないパロディにすぎないことを論証している。(247-48)

バトラーは、このような矛盾に満ちた状況を打開する方策として「ジェンダー・トラブル」、すなわち「パフォーマンス的な攪乱」(228)を提唱している。そしてその具体的な方法として、ドラッグ的な異性装(241)などのクロスジェンダー・パフォーマンスを日常生活において遂行することを挙げている。

バトラーが提唱する「ジェンダー・トラブル」は、政治的に捏造された社会規範に揺さぶりをかける「攪乱」行為であり、それ自体有意義なことではあるが、攪乱するだけで十分なのであろうか。攪乱によりもたらされる脱構築、あるいはポジティブな破壊と同時に、本来あるべき状態に再構築を促す効力を及ぼしてこそ、「ジェンダー・トラブル」は成就するのではないだろうか。本質的な「ジェンダー・トラブル」は、然るべきステージを与えられた一流の表現者によるクロスジェンダー・パフォーマンスあるいは作品においてこそ可能になる。珍奇なものとして注目を浴びるのではなく、観る者に美的感動を与え、美の形態として承認されるプロセスにおいて、真の「ジェンダー・トラブル」が成立すると言えよう。このプロセス自体は目新しいものではなく、古代ギリシャにおいては男女の性差が露わではないアンドロギュヌス的な身体美が至高とされており<sup>1</sup>、また、演劇やオペラにおける異性装役やカストラート、歌舞伎や京劇の女形、バレエ、コンテンポラリーダンス、ファッションやポップミュージックなど、高尚芸術からサブカルチャーに至るまで多くのアーティストによって遂行され、受容されてきた。バトラーの理論は学際的でありながら美学的視点が欠落しているように思えるが、この事実もまた、彼女が主張するジェンダー・パフォーマンスのパロディ性を象徴している。これら既存のパフォーマンスの中には表現様式として確立して久しく、それゆえインパクトは薄れてきている例もある。しかし、芸術性も評価の対象とされる一方、社会規範に準じた健全さが重視される競技スポーツであるフィギュアスケ

ートにおいては、クロスジェンダー・パフォーマンスは今なお受容度が低い状態にあり、それゆえ大きなインパクトをもたらし得ると言える。そして、21世紀初頭の現在、フィギュアスケート界は依然として保守的であるが、確かな変化が起こりつつある。その契機をもたらしたのは、21世紀初頭に圧倒的な存在感を示した二人のスケーター、エフゲニー・プルシェンコ (Plushenko, Evgeni, ロシア) とジョニー・ウィアー (Weir, Johnny, アメリカ) である。

本稿では、彼らをはじめとする男子シングル選手のオリンピックでの演技に着目し、21世紀のフィギュアスケートにおけるジェンダー・クロッシングの意義と課題についてパフォーマンス・スタディーズの視座で考察する。なお、本稿で論じる「クロスジェンダー・パフォーマンス」は異性を演じるジェンダー交差に限定せず、両性具有的なものやジェンダーを超越したものも含め、既存のジェンダー概念を逸脱したあらゆる表現を対象とする。また、近年女子シングル<sup>2</sup>にも興味深い展開が見られるが、本稿においては、次章で触れる特殊な背景下にある男子シングルスケーティングのパフォーマンスに焦点を当てる。

## 2. 男子シングルスケーターをめぐる背景

### 2.1 ジェンダー・バイアスとステレオタイプ化

フィギュアスケートは男性貴族のスポーツとして発展したが、1920年代末期、ソニア・ヘニー (Henie, Sonja, ノルウェー) が少女らしい演技で人気を博して以来、女子のスポーツというイメージが定着 (Adams 64-69; Klomsten et al. 629) した。そして同時に男子が数あるスポーツ種目の中でフィギュアスケートを選ぶこと自体が軟弱であるとみなされる傾向が高まり (Adams 157)、男子フィギュアスケーターは同性愛者であるという偏見 (Adams 60, Jones) さえ広まっていった。ジェンダー・バイアスを象徴するような言説であるが、フーコーが指摘したヴィクトリア朝の規範にまで遡る根深いものである。欧米にはキリスト教的見地から男子のパフォーマンスでは肉体的剛健さを重視する Muscular Christianity の伝統もあり、特に北米のスポーツ界では同性愛嫌悪の傾向が強く (Lucyk 66)、男子フィギュアスケーターはしばしば攻撃の対象となった。

過酷な社会的圧力の中、男子シングル選手は偏見を払拭するような力強いスケートिंगを志向するようになった。理想とされたのは3回転ジャンプ成功させたディック・バトン (Button, Richard Totten, アメリカ) のダイナミックなパフォーマンスであり、ヘニーをモデルとする女子シングルとの差異が広がり、男子はスポーツ志向、女子は芸術志向とステレオタイプ化していった。(Adams 156-60)

こうした二極化の状況はまさにバトラーが説いたジェンダー・パフォーマンスが遂行されていたことを意味し、本来スポーツと芸術の融合であるはずのフィギュアスケートが本質的分裂をもたらしていた。

## 2.2 フローズン・クローゼット

1970年代、インスブルック五輪(1976年)金メダリストのジョン・カーリー (Curry, John, イギリス) と銅メダリストのトラー・克蘭ストン (Cranston, Toller, カナダ) は、優雅で芸術性の高いパフォーマンスで観客を魅了し、男子シングルに新しい境地が開けたかのように思われた。しかしそれも束の間であり、1980年代後半には AIDS (後天性免疫不全症候群) の影響もあり、再び力強い男性性が歓迎される「マッチョ時代」(Adams 31)が到来していた。

スーザン・ソntag (Sontag, Susan) が『エイズとその隠喩』(1988年)で詳述している通り、1981年に最初の感染者が確認されたこの流行疾患をめぐって、同性間の性交渉で感染する「ゲイの疾病」、「逸脱した性への罰」(92)といった言説が飛び交い、同性愛者嫌悪の風潮が高まった。その影はフィギュアスケート界にも及び、引退後はカンパニーを率いて芸術的なアイスショーを披露していたカーリーが1994年に AIDS による心臓発作で死亡するなど、高名なスケーターの発病や死亡が衝撃を与えた。

国際スケート連盟 (ISU) や北米のスケート連盟はこの状況を懸念して、男子シングル選手にはより力強くダイナミックなパフォーマンスを奨励した。こうして、カーリー以前を凌ぐ男性化の時代が到来し、エルヴィス・ストイコ (Stojko, Elvis, カナダ) やフィリップ・キャンデロロ (Candelloro, Philippe, フランス) に代表される、男性的な逞しさを表象するパフォーマンスが歓迎された。

イヴ・コゾフスキー・セジウィック (Sedgwick, Eve, Kosofsky) は『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀』(1990)において、性的少数者が自身のセクシュアリティを秘匿せざるを得ない状況について論じているが、この状況はフィギュアスケート界にも当てはまる。ジェンダー・バイアスに加えてセクシュアリティ・バイアスの存在が顕在化し、ブライアン・ボイタノ (Boitano, Brian, アメリカ) が「魔女狩りのようだ」と語った通り、当事者たちには多大なストレスとなった。(Adams 37)

なお、このような時代にあっても、現役中にカムアウトした最初のスケーターであるルディ・ガリンド (Galindo, Rudy, アメリカ) は偏見と闘いながらも好成績を収めた。また、アレクセイ・ウルマノフ (Urmanov, Alexei, ロシア) は、古典的な王子という男性モデルの表現者としての評価を確立するとともに、一部のプログラムで女性キャラクターを思わせる動きを挿入し、カーリーらに続く先駆者となった。

## 3. クロスジェンダー・パフォーマンスの嚆矢

### 3.1 ソルトレイクシティ五輪とプルシェンコ

21世紀を迎え、国や宗教、文化によって差異はあるが、多様なセクシュアリティの存在について理解が広まりつつあったが、フィギュアスケート界は依然としてジェンダー・バイアスとセクシュアリティ・バイアスの呪縛下にあった。その中で一人、ウルマノフと同じアレクセイ・ミーシン (Mishin, Alexei) コーチの門下で研鑽を積んだエフゲニー・プルシェンコが異彩を放っていた。

比類ないテクニックで知られる彼のパフォーマンスには、力強さが際立つストイコやキャンデロロ、そしてライバルとみなされたアレクセイ・ヤグディン (Yagudin, Alexei, ロシア) らとは異なる「エレガントな」(ランビエル 83) 洗練があった。それには生来の柔軟性や、独特の表現を生み出すクロスジェンダー的な要素も起因していた。プルシェンコは19歳でソルトレイクシティ五輪(2002年)に出場し、斬新なクロスジェンダー・パフォーマンスを披露し、21世紀のフィギュアスケートにおける最初の「ジェンダー・トラブル」の担い手となった。

### 3.2 クロスジェンダー・エレメントによるパフォーマンス

従来男子シングルスケーティングで柔軟性を強調することはタブーとされ、脚を高く上げる動きや、腕や手を駆使した表現は回避される傾向があり、規定で女子シングルのみにも必須のレイバックスピンやスパイラルといったエレメント<sup>3</sup>を行う男子は稀だった。例えば、ヘニー以後、男子がスパイラルを行うと女性的であると評される傾向にあり、1970年代にカーリーが復活させるまで男子シングルのプログラムからほぼ姿を消していた。(Adams 218-28)

柔軟性に優れた男子スケーターが真価を発揮できない状態にあったと言えるが、プルシェンコはデビュー当初からこれらのエレメントを得意としており、ドーナツスピンやビールマンズピンといった女子にも高難度のスピンを成功させた最初の男子スケーターとなった。ジュニア時代にはサン＝サーンスの「白鳥」によるエキシビションプログラムでアラベスクポジションのスパイラルやビールマンズピンを見せている。そして、ソルトレイクシティ五輪でも SP (ショートプログラム) と FS (フリースケーティング) の両プログラムでビールマンズピンを披露した。

女子が得意とする柔軟性を要するエレメント、すなわち男子にとってのクロスジェンダー・エレメントを行うことは、テクニックによってジェンダーを超越できることを意味し、「ジェンダー・トラブル」的な意義は非常に高いと言えよう。実際、プルシェンコのビールマンズピンは、女性的で柔弱というよりアクロバティックかつダイナミックな印象を与え、従来の固定観念を打ち破るものとなった。

しかし一方、成人男子の身体構造上困難であるこのエレメントには身体的リスクが伴うことも否めない。プルシェンコも故障をきたしてビールマンズピンを封印することとなく、オリンピックで披露したのはソルトレイクシティ五輪が最初で最後となった。

### 3.3 クロスジェンダー・キャラクター・パフォーマンス

観客を楽しませるための余興として行う男性が女性を演じるパフォーマンス<sup>4</sup>は古くから存在し、クロスジェンダー性は高いが虚構であることが明白であ

るため、比較的寛容に受容されてきた。しかし、競技の場合は状況が異なり、オリンピック競技で男子選手が女性を演じることは回避されてきた。

ところが、プルシェンコはソルトレイクシティ五輪の FS “Carmen Suite” で極めて露わに女性を演じた。ビゼー作曲のオペラ『カルメン』を題材とするこのプログラムの中で、闘牛士のコスチュームを纏った彼は、闘牛士エスカミリオ、情熱的な美女カルメン、そして下士官ドン・ホセの3役を明確に演じ分けたのだった。冒頭のエスカミリオ・パートでは、4T+3T+3Lo<sup>5</sup>という高難度のコンビネーション・ジャンプ、続く 4T という 2 回の 4 回転ジャンプを成功させて圧倒的な技量を印象づけた後、彼が演じたのは轟惑的なカルメンだった。誘惑の場面のアリアに合わせて腰を振る彼のあまりの豹変ぶりに、観客たちは驚き魅了された。コミカルな表現ながら、オリンピックの競技プログラムでこのようにあからさまなクロスジェンダー表現が遂行されたのは前代未聞のことだったが、恐らく採点に影響することはなく、ヤグディンには及ばなかったものの芸術点 (旧採点法) においても高評価を獲得した。しかし、ソルトレイクシティ五輪の公式記念ブックでは、プルシェンコのパフォーマンスについて “flamboyant” という男性同性愛者を揶揄する際に多用される語を用いて記録しており (Salt Lake Olympic Committee 2002)、オリンピック競技のパフォーマンスとして必ずしも歓迎されなかったことが窺われる。プルシェンコはさらに、エキシビションでは 3 人の男女のキャラクターを融合したような、露出度も高い赤のコスチュームでより女性的なカルメンを演じ、クロスジェンダー・パフォーマンスの魅力を印象づけた。

なお、プルシェンコはソルトレイクシティ五輪の SP “Michael Jackson Medley” では同時代人マイケル・ジャクソンのクロスジェンダー的魅力を表現し、2004 年の世界選手権で芸術点満点の高評価を獲得した FS “Tribute to Vaslav Nijinsky” では、実在したバレエダンサー、ニジンスキーへのオマージュとしてクロスジェンダー的官能性が濃厚なパフォーマンスを披露した。これらの事実は、架空、あるいは実在の女性や両性具有的なキャラクターを演じるクロスジェンダー・キャラクター・パフォーマンスが社会

的に承認されたことを意味する。

プルシェンコは、ビールマンスピンを封印した頃から、次第に男性性を強調するパフォーマンスに注力するようになったが、21世紀の男子シングルスケートにおいてクロスジェンダー・パフォーマンスの嚆矢となったのは彼であり、フィギュアスケートの進化において重大な役割を果たしたと言える。

## 4. クロスジェンダー・パフォーマンスの衝撃

### 4.1 トリノ五輪とウィアー

ソルトレイクシティ五輪の後、フィギュアスケート競技における採点方法が大きく変わり、新時代のパフォーマンスのあり方が模索されていた。男子シングルではなおも超男性化の傾向にあり、4回転ジャンプの完成度が勝敗を左右した。その中に一人、繊細で芸術性の高い表現で注目を集めたスケーターが存在した。ジュニア世界選手権優勝、全米選手権優勝の実績をもつジョニー・ウィアーである。トリノ五輪（2006年）において、プルシェンコに代わり新たな「ジェンダー・トラブル」の立役者となったのは、当時20歳のウィアーであった。

### 4.2 ユニーク・クロスジェンダー・キャラクター・パフォーマンス

トリノ五輪でウィアーが披露したSP“The Swan”は、オリンピック史上初の自己表現性が明確な「クロスジェンダー・パフォーマンス」であり、「ジェンダー・トラブル」と同義の「ジェンダー・ベンディング」という禁断の領域に立ち入るものであった。ウィアー自身、「高貴な雌の白鳥」(Weir 125 筆者訳)を演じることを意識し、その危険性も承知の上で演じた“The Swan”は、この上なく優雅でありながら破壊的かつ衝撃的であった。

カミーユ・サン＝サーンス作曲の組曲『動物の謝肉祭』の中の1曲である「白鳥」は、アンナ・パブロワのために考案されたバレエの小品「瀕死の白鳥」の曲として知られ、オクサナ・バイウル (Baiul, Oksana Sergeevna ウクライナ)をはじめとする多くの女子スケーターが用いている。ウィアーはこの曲にのせて、全く新しい白鳥を表現した。指先まで魂をこめて表現した鳥の翼の動きや、トウシューズを

履いているかのようなステップを含むバレエ的な要素に、フィギュアスケートならではの流麗さを融合したパフォーマンスは極めて芸術性が高く、野性の白鳥の優雅さや強さ、悲劇的な美しさをリアルに表現していた。そして、ウィアー自らのデザインによるコスチュームがそれをさらに際立てていた。

雌の白鳥を意識しながらも、ウィアーのパフォーマンスには男子ならではのスピード感や躍動感があり、女性美と言うより両性具有美の象徴のような、新しい白鳥が表現されていた。3A ジャンプや3Lz+3T のコンビネーション・ジャンプ、レベル4のフライングシットスピンなど、ほとんどのエレメントを加点のつく完成度で成功させたウィアーのパフォーマンスは、技術点において、高難度の4回転ジャンプに挑んだ選手のスコアを上回り、プルシェンコに次ぐSP第2位の評価を得た。このパフォーマンスは、新採点法において、4回転ジャンプを行わなくても勝利する可能性があることをオリンピックで示した最初の例でもあった。

“The Swan”はクロスジェンダー・キャラクター・パフォーマンスの一種ではあるが、アンナ・パブロワの「瀕死の白鳥」という既存のキャラクター<sup>6</sup>とは異なる独自のものであった。また、ウィアーのキャラクターとスケートがコレオグラファーのタラソワ (Tarasova, Tatiana) にインスピレーションを与え生み出された、彼自身にとっても自己表現性の強いプログラムであった。この種のパフォーマンスは、そのインパクトの強さと独創性において、「ユニーク・クロスジェンダー・キャラクター・パフォーマンス」と呼ぶに相応しい。

### 4.3 エモーショナル・パフォーマンス

トリノ五輪におけるウィアーのFS “Otonal”は優美さと激しさの対比が印象的な秀逸なプログラムであった。長野五輪では女性らしい表現で定評のあるマリア・ブッテルスカヤがこの曲を用いたことがあるが、自身のデザインによる白いレースがあしらわれたブルーのコスチュームを纏い独自の世界観を表現したウィアーのパフォーマンスは、彼女以上に繊細であった。ウィアーはジャンプの失敗などのミスで順位を落としたが、他の選手たちが大技を競い合

う中、感傷的なピアノ曲にのせて情感溢れる表現を行い独特の存在感を放っていた。

ヘニー以後、男子があまりに抒情的な表現を行うことは回避される傾向にあったが(Adams 20-21)、「エモーショナル・パフォーマンス」と呼ぶに相応しいこの種のパフォーマンスを男子スケーターが遂行することで、繊細な感情表現だけに留まらず、ジェンダーにとらわれないスケールの大きなメッセージを伝えることが可能になる。ウィアーはトリノのエキシビション“My Way”では情感をこめたクリーンなスケートで自身の心情と決意を表現しているかのようなパフォーマンスを披露した。その後も“Ave Maria”など様々なエモーショナル・パフォーマンスで、ジェンダーを超えた普遍的なメッセージを発信している。

メダルを逃したものの、トリノ五輪においてウィアーのクロスジェンダー・パフォーマンスが示した意義は大きい。彼が表現したのは既存のジェンダー概念を逸脱した両性具有的な美の世界であり、ジェンダー・パフォーマンスな振る舞いが美德とされる社会、AIDS 後の弊害が残存する社会、そしてその象徴のようなフィギュアスケート界に対して脱構築を促す強烈なアンチテーゼを突きつけた。そして皮肉にも、自身の「純真で上品な」(Weir 124 筆者訳)イメージをも破壊する結果となった。“The Swan”以後、ジャーナリズムはウィアーを“flamboyant”と形容するようになり、そこに同性愛者を揶揄する悪意が込められていることは明白だった。

## 5. クロスジェンダー・パフォーマンスの発展

### 5.1 バンクーバー五輪とウィアー

20 世紀末からインターネットの普及により様々な変化がみられたが、2000 年代半ば頃から、ソーシャルメディアの発達により、一般のインターネットユーザーも世論形成に直接参加することが容易になった。このため、新聞やスポーツ誌などのジャーナリストの視点だけではなく、多様な価値観をもつ世界中のファンの感想や評価が直接公開され、フィギュアスケート界にも影響力を及ぼした。

一方、男子シングルにおけるパワー志向は継続しており、ウィアーでさえもトリノ直後のシーズンに

は男性的なプログラムに挑戦した。その後ウィアーはコーチとの決別などの試練を経て研鑽を積み、2007-08 シーズンには両足着氷ながら 4 回転ジャンプを成功させて全米選手権 2 位となり、世界選手権で銅メダルを獲得するなどの好成績を収めている。

ウィアーの華のある中性的な容顔と自己防衛しない言動は、ときに輿論を買いつつもメディアに歓迎され、良くも悪くも注目を浴びる存在となった彼はスポーツに無関心な人々をも魅了し、フィギュアスケートファンの拡大に貢献することとなった。しかし、彼にとってメディアとの関わりは諸刃の剣であり、真摯なアスリートである本質よりも“flamboyant”な面に注目が集まったことは、セクシュアリティ・バイアスの呪縛下にあるフィギュアスケート界において不利なことであった。彼の中性的な艶やかさは北米では批判の対象となることも多く(田村 2011 56)、男性化を推進する USFSA (全米スケート連盟)との関係は悪化の一途を辿っていた。また、彼のパフォーマンスの芸術性にはファンにも専門家にも定評があったが実際の成績では演技構成点の評価が低く、「偏執的な採点」(56)がなされている可能性もあった。このような状況の中、バンクーバー五輪代表選考を前にして苦境に立たされたが、ウィアーは技術点の高さで勝ち残り、オリンピック出場権を獲得した。

バンクーバー五輪でウィアーは、クロスジェンダー・パフォーマンスの抱える二面性を象徴するかのような対称的なプログラムを披露した。いずれ自己表現性の高いものであり、再びオリンピックに「ジェンダー・トラブル」を巻き起こすこととなった。

### 5.2 キャンプ・パフォーマンス

ウィアーの SP “I love you, I hate you”は、彼とフィギュアスケート界とのアンビバレントな関係性を物語るプログラム(Weir 247)であり、保守的な人々がクロスジェンダー・パフォーマンスに対して抱く“flamboyant”なイメージを敢えて誇張したような、いわば「キャンプ」なパフォーマンスであった。

「キャンプ」についてはソントグのエッセイ「《キャンプ》」についてのノートに詳述されているが、バトラーが提唱する「ジェンダー・トラブル」の方

法論と一致する点も多い。そして、ソントグが「キャンプ」の定義として挙げる「一種の審美主義」(434)、「両性具有的スタイルの極致」(439)、「同性愛趣味」との近似と重複(457)といった多くの要素がウィアーのこのプログラムに当てはまる。ウィアーの全てのプログラムが該当するようにも思えるが、「キャンプなアウトサイダー」(石井 157)の美が表現されている点において、“I love you, I hate you”は「キャンプ」そのものの、しかもソントグが「必ず有害であるらしい」(443)と言う「意図的なキャンプ」(443)であった。

ウィアー自身がデザインしたコスチュームも「キャンプ」な作品であり、素肌が透けて見えるライクラ地にピンクのタッセルレースやフリンジがあしらわれ、深いスリットの入った露出度の高いものであった。このコスチュームはオリンピック前から問題視され、競技に対する真剣さを疑われ評価に悪影響が及ぶ恐れもあると懸念する声もあった。(Longman)

ピンクのアクセントがあまりにも印象的なこのコスチュームを纏ったウィアーは、偽悪的な自己表現とも言える、彼自身の一面を表現するパフォーマンスを繰り広げた。人工的なわざとらしさや悪趣味を極めてインテリジェントな美へ昇華するという「キャンプ」の美意識を体現するものであったが、オリンピックというスポーツ競技の場においてはかかつてない挑発的な行為であった。とはいえ、冒頭の3Lz+3Tのコンビネーション・ジャンプ、続く単独の3Aジャンプをはじめ、ほとんどのエレメントを加点のつく精度で成功させ、技術点では高得点を獲得した。しかし、随所で腰を振ってクロスジェンダー的官能性を振りまき、審査員席の前で刺激的なポーズを見せ、投げキスで終わるといった「キャンプ」なアクションのためか、トランジションをはじめとする演技構成点の評価が低くSP6位という結果であった。

### 5.3 ユニーク・クロスジェンダー・キャラクター・パフォーマンスの進化

FS “Fallen Angels”は、ウィアー自身、自分のスケート人生そのもの(Weir 249)と自伝で語っているように、ジェンダーを超越した存在である天使、しかも異端の「墮天使」を表現したプログラムであった。

前の滑走者への喝采の余韻が残る中、彼が登場し

た瞬間から、リンクの空気は一変した。「キャンプ」なSPとは全く異なる、一種神聖で静謐な雰囲気。彼自身のデザインによる羽飾りのある白のコスチュームはトリノの“The Swan”を彷彿とさせた。異質な者に対して冷たい風と制裁の矢が吹き付けられるような地上に堕ちて、翻弄され、深い傷を負いながらも、美しく、そして強くありたいと闘う姿。女性的な優雅さと男性的な迫力が融合した、無性ではなく両性具有的の天使。それは、真のクロスジェンダー・パフォーマーとしての自覚をもつ彼にのみ表現できる天使の表象であった。トリノの高貴な白鳥をさらに進化させたような独創的なクロスジェンダー・キャラクター・パフォーマンスであり、その異質の美のインパクトにおいて衝撃的であった。

4回転ジャンプの大技はないが、しなやかな動きの中、単独の3Aジャンプや3Aを含むコンビネーション・ジャンプなど、多くのエレメントを成功させ、感情を込めながらも緊張感が保たれた完成度の高いパフォーマンスが感動を呼んだ。氷上に仰向けになって背をそらせる最後のポーズに観客は沸き、スタンディング・オベーションが捧げられた。

クロスジェンダー芸術の粋を極めた“Fallen Angels”は、会場で応援するファンはもちろん、オリンピックをテレビで観ていた世界中の人々を感動させた。しかし、発表されたスコアは「意外なほど低かった」(田村 2010 39)ため、客席からブーイングが起こった。この結果は今も、クロスジェンダー・パフォーマーの受難として語り継がれている。

### 5.4 ドラッグクイーン・パフォーマンス

ウィアーがバンクーバーのエキシビションのために用意していたプログラム“Porker Face”は恐らく男子シングルの男性化を推進するISU、USFSA、Skate Canada(カナダスケート連盟)にとって、世界放映されるのに最も好ましくない類のプログラムであった。しかし、ウィアーが総合6位の結果となりエキシビションに不参加となり、彼らの懸念は回避された。幻のプログラムとなった“Porker Face”は、ウィアーのデザインによる奇抜なコスチューム、メイクアップで大胆なパフォーマンスを披露する刺激的なものであり、シンガーソングライターのレディ・ガ

がによる歌詞はバイセクシュアルである彼女の感性を表現しており、強烈なメッセージを含んでいた。

この種のパフォーマンスはキャンプ・パフォーマンスの一種とも言えるが、破壊的なインパクトがより直接的で強力であり、パトラーが提唱するジェンダー・トラブルの最も明瞭な形態であるとも言える。

二つのオリンピックとその間のシーズンにおいて、ウィアーはただ一人でクロスジェンダー・パフォーマンスをユニークな形態で進化させ、多様な表現の可能性を開くとともに、「ジェンダー・トラブル」を巻き起こしてきた。自己表現性が濃厚であるため、保守的な社会では受け入れ難い面もあるが、それだけに攪乱のインパクトも強いと言える。オリンピックのメダリストとなることはできなかったが、ウィアーが観客に与えた衝撃と美的感動、そして社会的意義は計り知れない。

バンクーバー五輪の後ウィアーはソチ五輪出場を目指したが、2013年、引退を表明した。最後のシーズンにはSP“Porker Face”でドラッグクイーン・パフォーマンスを競技プログラムとして披露し、FSではヘンデルの「サラバンド」など悲壮な美しさを湛えた音楽にのせて格調高いエモーショナル・パフォーマンスを見せ、有終の美を飾った。そしてプロスケーターとして活躍する今も、ウィアーのクロスジェンダー・パフォーマンスは進化を続け、世界のファンを魅了し続けている。

## 6. 「ジェンダー・トラブル」の影響

### 6.1 フィギュアスケート界への影響

プルシェンコが身体的リスクを冒し、ウィアーが数々の受難の中遂行したクロスジェンダー・パフォーマンスは、フィギュアスケート界と社会に意義ある「ジェンダー・トラブル」をもたらしていた。

ソルトレイク、トリノ、バンクーバー、ソチの4大会のオリンピックにおける男子シングル競技の上位選手のパフォーマンスのクロスジェンダー度について分析してみると、その度合いはトリノ五輪以後、増加している（表1）、社会的趨勢もよるが、プルシェンコやウィアーの影響も大きいと考えられる。特に、トリノ五輪以後、クロスジェンダー・キャラクター・パフォーマンスが増え、男女を演じ分ける

ものや、ヒロインを含む作品全体の世界観を表現するものを複数のスケーターが披露している。バンクーバー五輪銅メダリスト高橋大輔のFS“La Strada”やステファン・ランビエル（Lambiel, Stephane, スイス）のFS“La Traviata”では、男性キャラクターも演じながら作品全体のテーマとともにヒロインの心情が見事に表現された。

また、ISUが定めた新採点法ではクロスジェンダー・エレメントが得点アップをもたらすことも可能となり、柔軟性を備えた選手は積極的に取り入れるようになった。トリノ五輪ではショーン・ソーヤー（Sawyer, Shown, カナダ）がY字スパイラルやY字スピンのプルシェンコに匹敵する柔軟性を披露し、ランビエルや高橋も美しいポジションのレイバックスピンを見せている。プルシェンコが封印したビールマンズピンはバンクーバー五輪でデニス・テン（Ten, Denis, カザフスタン）がオリンピックに復活させ、ソチ五輪ではプルシェンコから教わった（羽生 142）という羽生結弦、そしてマイケル・クリスチャン・マルティネス（Martinez, Michael Christian, フィリピン）も取り入れている。また、レイバックスピンやドーナツスピンは、アクロバティックとは言えないほどの頻度で行われるようになっている。

これらのクロスジェンダー・パフォーマンスは自己表現の要素が希薄であるため比較的受け入れやすいとは言え、かつては回避されていたパフォーマンスが多く選手に遂行可能になったことは、先駆けて高い評価を得て社会的承認を示したプルシェンコの功績であるともいえる。

これに対して、ソチ五輪の時点でウィアーのように自己表現性の高いユニーク・クロスジェンダー・キャラクター・パフォーマンスやキャンプ・パフォーマンスを行うスケーターをオリンピック出場選手は現れなかった。しかし、エモーショナル・パフォーマンスなど、以前は女性的とみなされていた表現を臆せず行える時代が到来したことは確かであり、ウィアーによる「ジェンダー・トラブル」の効果も大きいと言える。また、ウィアーのパフォーマンスと言動が注目を浴びた時期には、揶揄や攻撃の矛先は専ら彼に向けられ、彼がスケープゴートになっていたような状況もあったと考えられる。



表1 冬季オリンピック フィギュアスケート男子シングル競技上位12位までの選手のパフォーマンスのクロスジェンダー性の比較

各選手のパフォーマンスのクロスジェンダー性を実際の映像から確認し、1~4点の評価(1:非常に男性的、2:やや男性的、3:ややクロスジェンダー的、4:非常にクロスジェンダー的)を行った。Music/Themeは音楽と表現した題材、Styleはコスチュームとヘアスタイルを対象とし、Performanceでは、クロスジェンダー・エレメント(EL)/クロスジェンダー・キャラクター(CR)/エモーショナル(EM)・パフォーマンスは3点、ユニーク・クロスジェンダー・キャラクター(UC)/キャンプ(GM)・パフォーマンスは4点とした。

Rank	Name	Nation	Short Program				Free Skating					
			Music/Theme	Style	Performance	Music/Theme	Style	Performance				
<b>2002 Winter Olympics (Saltlake City, USA)</b>												
1	Yagudin	RUS	Winter	1	1	1		Man in the Iron Mask	1	1	1	
2	Plushenko	RUS	Michael Jackson Medley	3	2	3	EL/CR	Carmen	3	1	3	EL/CR
3	Goebel	USA	Danse Macabre	1	2	1		An American in Paris	2	1	2	
4	Honda	JPN	Don Quixote	1	1	1		Concierto de Aranjuez	1	1	1	
5	Abt	RUS	Artsakh	1	1	1		Piano Concerto No.2 Op.18	2	3	2	
6	Eldredge	USA	Carmina Burana	1	1	1		Lord of the Rings	1	1	1	
7	Weiss	USA	Malagueña	1	1	1		Che Galida Magnina, etc	2	1	2	
8	Stojko	CAN	Lion	1	1	1		Dragon: The Bruce Lee Story	1	1	1	
9	Li	CHN	Kung Fu	1	1	1		Star Wars	1	1	1	
10	Liu	AUS	Pearl Harbor	1	1	1		Journey of Man	2	1	3	EL
11	Dambier	FRA	The Last Temptation of Christ	3	3	2		La Boheme	3	2	2	
12	Van Der Perren	BEL	Tango Lesson	1	1	3	EL	Berlin	1	1	3	EL
<b>2006 Winter Olympics (Torino, Italy)</b>												
1	Plushenko	RUS	Tosca	1	1	3	EL	The Godfather	1	1	3	EL/CR
2	Lambiel	CHE	Dralion	1	1	1		The Four Seasons	2	2	2	
3	Battle	CAN	Sing, Sing, Sing	1	1	1		Samson and Derilla	2	1	3	EM
4	Lysacek	USA	España cañí	1	1	1		Carmen	1	1	1	
5	Weir	USA	The Swan	4	4	4	UC	Otonal	3	4	3	EM
6	Joubert	FRA	Die Another Day	1	1	1		Lord of the Dance	1	1	1	
7	Savoie	USA	Windmills of Your Mind	2	2	3	EM	Journey of Man~Mission	2	2	3	EM
8	Takahashi	JPN	El Tango de Roxanne	1	2	3	EL	Piano Concerto No. 2	2	3	3	EL
9	Van Der Perren	BEL	Computer Game: Samba-Adagio	1	1	2		Pirates of the Caribbean	1	1	1	
10	Min	CHN	Swing Medley	2	3	3	EL	Alexsander	1	1	1	
11	Klimkin	RUS	1001 Nights	2	2	2		Matrix	2	1	3	EL
12	Sawyer	CAN	Libertango	1	1	3	EL	Moments in Love	2	1	3	EL
<b>2010 Winter Olympics (Vancouver, Canada)</b>												
1	Lysacek	USA	The Firebird	1	1	1		Scheherazade	1	1	1	
2	Plushenko	RUS	Concierto de Aranjuez	1	1	3	EL	Tango Amore	2	1	3	EL
3	Takahashi	JPN	Eye	1	2	3	EL	La Strada	3	2	3	EL/CR
4	Lambiel	CHE	William Tell Overture	1	1	3	EL	La Traviata	3	2	3	EL/CR
5	Chan	CAN	Tango de los Exilados	1	1	1		Phantom of the Opera	2	1	2	
6	Weir	USA	I love you, I hate you	4	4	4	CM	Fallen Angels	4	3	4	UC
7	Oda	JPN	Totentanz, Dance of Death	1	1	2		Charlie Chaplin	2	1	2	
8	Kozuka	JPN	Bold as Love	1	2	1		Guitar Concerto	2	1	2	
9	Abbott	USA	A Day in the Life	2	2	2		Symphony No.3 Organ Symphony	2	2	3	EM
10	Březina	CZE	Puttin' On the Ritz	2	2	2		An American in Paris	2	2	2	
11	Ten	KAZ	Sing, Sing, Sing	2	2	3	EL	Concierto de Aranjuez	2	3	3	EL
12	Amodio	FRA	Munich	2	2	2		Amélie	3	2	3	EL/CR
<b>2014 Winter Olympics (Sochi, Russia)</b>												
1	Hanyu	JPN	Parisienne Walkways	1	1	3	EL	Romeo and Juliet	2	4	3	EL/EM
2	Chan	CAN	Elegie in E Flat Minor	2	1	2		The Four Seasons	2	2	2	
3	Ten	KAZ	Danse Macabre	1	1	3	EL	The Lady and the Hooligan	1	1	3	EL
4	Fernández	ESP	Satan Takes a Holiday	2	2	2		Peter Gunn	1	1	1	
5	Machida	JPN	East of Eden	2	2	3	EM	The Firebird	2	3	3	EL/CR
6	Takahashi	JPN	Sonatina for Violin in C-sharp minor	2	3	3	EL	Beatles medley	2	2	3	EL/EM
7	Han	CHN	The Cotton Club	2	1	3	EL	The Blue Danube	2	1	3	EL
8	Liebers	GER	Clocks	2	2	3	EL	Smells Like Teen Spirit	2	1	3	EL
9	Brown	USA	The Question of U	3	4	3	EL	Reel Around the Sun	2	4	3	EL
10	Březina	CZE	In the Hall of the Mountain King	2	2	3	EL	Sherlock Holmes	2	2	2	
11	Verner	CZE	Dueling Banjos	2	2	2		Tango Medley	2	2	2	
12	Abbott	USA	Lilies of the Valley	3	2	3	CR	Exogenesis: Symphony Part 3	2	1	3	EM

## 6.2 社会への影響

バンクーバー五輪は、プルシェンコが4回転ジャンプ論争を起こしたことで知られるが、ウィアーもまた、競技後にメディアの注目を集めることになった。ウィアーのパフォーマンスはその美しさと芸術性の高さで賞賛的となったが、女性的であると揶揄する声もあり、カナダのケーブルテレビのキャスターがウィアーは性別検査を受けるべきだなどとコメントした。ウィアーは気に留めていなかったが、メディアの要望に応じ公式記者会見を行い、スケート志望の少年たちに悪影響だと言われたことに異議を唱えた。それは、自己弁護やLGBT社会のための抗議ではなく、世界中の“wierdos” (Weir 255)、すなわち異端とみなされる人々に向けた真摯なメッセージであった。彼のパフォーマンスにも、このとき語ったメッセージと同じ思いが込められていると考えられる。クロスジェンダー・パフォーマンスは、ジェンダー規範を攪乱するだけでなく、個性を発揮することを阻むすべての既成概念や権力へのアンチテーゼとなり得るのである。

バンクーバー後、ウィアーはフィギュアスケート以外の活動にも積極的に取り組み、クロスジェンダーカルチャーのアイコンのような存在になっていった。自身のセクシュアリティについては競技に無関係なので公表不要という態度を貫いてきたが、自伝の中でホモセクシュアルであることに触れ(Weir 84)、現役中にカムアウトした二人目のスケーターとなった。

2011年、ソチ五輪での功績が評価され、ウィアーはLGBTの人権に関わる二つの賞を受賞した。LGBTのコミュニティとその課題を偏見なく正確に表現かつ報道するメディアを表彰するGLADD賞、そしてHuman Right Campaign (HRC)のVisibility賞である。彼の渾身のパフォーマンスは美的な感動を呼ぶとともにLGBTの人権擁護に貢献していたのである。

ウィアーのバンクーバー五輪での不当なスコアや、メディアに揶揄された事実は、フィギュアスケート界および一般社会におけるセクシュアリティ・バイアスの存在を暴露する事例としてしばしば取り上げられている。また、ウィアーの事例は、様々な論文で言及されており、性同一性障害のアスリートにつ

いて論じた論文では、フィギュアスケート界の柔軟性を示す事例として紹介されており(Semerian et al 30)、当事者たちにとって彼の存在が励みとなることが視られる。また、職場内の性差別に関する論文では、彼の事例が寛容な理解が得られている例として挙げられている。(Case 1370)

これらの研究にはフィギュアスケート界の実態について理解不足の面もあるが、クロスジェンダー・パフォーマーであるウィアーはジェンダー・バイアスやセクシュアリー・バイアスの抑圧下にある社会に希望を与える存在となっており、同時にフィギュアスケートのイメージアップに貢献していたと言える。ウィアーの「ジェンダー・トラブル」は、既存概念を攪乱させるだけでなく、ポジティブな効果を確実に及ぼしていたのである。

## 7. 結論：ソチ五輪にみる課題と展望

21世紀を迎えてからプルシェンコとウィアーを中心に発展してきたクロスジェンダー・パフォーマンスであったが、ソチ五輪(2014年)では新たな抑圧が生じていた。開催国ロシアに時代錯誤的な法令「ゲイ・プロパガンダ禁止法」が施行されたのである。この悪法は国際的な非難を浴びたが、どのような行為が該当するのか不明であり(小泉 2)、関係者たちは混乱に陥った。ジャーナリズムからも批判の声が上がり、特にフィギュアスケートにおけるフローゼン・クローゼット状態やセクシュアリティ・バイアスの存在が問題視され、ガリンドーやウィアーら性的少数者やクロスジェンダー・パフォーマーの受難もあらためて取り上げられた。(Jones; Whiteside)

かつてのメダリストにも抗議を込めてカムアウトを行う者が現れ、アメリカ代表団の一員に選出されたボイタノ(カルガリー五輪金メダリスト)はホモセクシュアルであることを公表し、コレオグラファーを務めたジェフリー・バトル(トリノ五輪銅メダリスト)はオリンピック会期中に同性結婚を挙げた。ウィアーはアメリカの全国放送テレビ局NBAのアナリストとしてソチ五輪に参加し、オリンピックは競技の場であり政治的表明をする場ではないのでこの機に乗じてのカムアウトには反対という見解を示

しつつ (Whiteside)、自らのセクシュアリティを表現するようにバンクーバーで物議を醸したコスチュームを彷彿させるピンクのジャケットを着て解説を行った。二つのオリンピックで「ジェンダー・トラブル」の立役者となり、同性結婚経験者である彼の存在自体が、時代錯誤的な法令に象徴される排他的な社会へのアンチテーゼとしての意義をもっていた。

そして彼らが見守る中、選手たちはそれぞれに実力を発揮した。法令の影響か、ソチ五輪において「ジェンダー・トラブル」と定義できるほど衝撃的なパフォーマンスは見られなかったが、プルシェンコとウィアーの血脈は確かに継承されていた。

それを象徴するのが金メダリストとなった羽生のFS “Romeo and Juliet”のパフォーマンスである。バトルの振り付けによる SP で高速のドーナツスピンなど柔軟性も生かした男性的な演技で史上最高得点を獲得した羽生は、FS では少女趣味で滑稽 (DiManno S3 筆者訳) などと批判も浴びつつ、ウィアーのデザインによる両性具有の美を表現するかのようなコスチュームで演技に臨んだ。そして、4T ジャンプを成功させるとともにビールマンスピンやレイバックイナバウアーなどアクロバティックなエレメントを披露し、自身が崇拜するウィアーとプルシェンコ (羽生 139) の両者の後継者であることを印象づけた。激しさと繊細さが共存しロミオとジュリエットを同時に演じているような渾身の演技で、絶望の中で苦闘し昇華する情熱を表現し感動を誘った。それはまた、少年らしい中性的な美貌と体型、柔軟性が残る年齢の選手にのみ可能なパフォーマンスでもあった。

そして、プルシェンコ自身がロシア代表としてクロスジェンダー・パフォーマンスをオリンピックで本格的に復活させたことも印象的であった。自身のベストプログラムのアンソロジーである FS ではニジンスキーの「牧神」のポーズを強調したが、バイセクシュアルのバレエダンサーとして名高いニジンスキーの美を表現し、しかも同性愛的な含意のある「牧神」のパフォーマンス (Kolb 160-164) を遂行することは法令に抵触しうるアグレッシブな行為でもあった。

彼らの他にも、ソチ五輪では上位選手の多くがクロスジェンダー・エレメントを取り入れ (表 1)、結

果的にクロスジェンダー・パフォーマンスは増加している。さらに、長髪で出場し無理のない構成でアクロバティックなパフォーマンスを披露したジェイソン・ブラウン (Brown, Jason, アメリカ) をはじめ新しいタイプの選手も登場している。

ソチ五輪の事例が示す通り、セクシュアリティの多様性に対する理解は広まりつつあるものの、無理解は国家規模で残存し、バトラーの提唱する「ジェンダー・トラブル」は今なおインパクトを持ち得ると言える。スケーター自身がアクティビストのように社会変革を意図してクロスジェンダー・パフォーマンスを遂行する必要はないが、指導者や支援団体は重要性を認識し、保守的な固定観念で自由な表現を阻むことのないように留意することが望まれる。

プルシェンコとウィアーによる「ジェンダー・トラブル」の効果と連鎖で、フィギュアスケート男子シングルスケートにポジティブな脱構築がもたらされ、新時代が到来した。クロスジェンダー・パフォーマンスは今後も、フィギュアスケートの進化において重要な役割を果たすだろう。かつてジェンダー・パフォーマンスな社会の再生産の場であったフィギュアスケートのリンクは今、ジェンダーのあり方や美と表現の新たな可能性を提示し開いていくステージへと変貌を遂げつつある。

#### 注釈

1 古代ギリシャの美の基準は「男にあって最も美しい姿 (『形』『形態』『型』) は女性的な面であり、女にあっては、その逆」(ドーヴァー 43)であったと言われる。

2 最初の「ジェンダー・トラブル」は男子シングル種目のみで開催の第2回世界選手権に出場し2位となった女子選手マジ・サイアーズによって遂行された。

3 現行の規定では、レイバックスピンは女子シングルSPの必須エレメント。2011-12年シーズンまでスパイラルまたはスパイラルシークエンスも必須であった。(International Skating Union)

4 フリースケーティングの創始者ジャクソン・ヘインズ (Haines, Jackson, アメリカ) は、19世紀半ばに女装姿でパフォーマンスを披露している。

5 3Lo はステップアウト判定。

6 バイウルやジュニア時代のプルシェンコによる同曲のプログラムはパブロワの「瀕死の白鳥」を踏襲。

参考資料

- Adams, M. L. *Artistic Impressions: Figure Skating, Masculinity, and the Limits of Sport*. Toronto: University of Toronto Press, 2011.
- Butler, Judith. *Gender Trouble: Feminism and the Subversion of Identity*. New York: Routledge, 1990.  
(竹村和子訳『ジェンダー・トラブル—フェミニズムとアイデンティティの攪乱』 青土社 1999年)
- DiManno, R. "Fashion police kept busy by ice dancing." *Toronto Star*. 18 Feb 2014. S3.
- Case, Mary Anne. "Legal Protections for the 'Personal Best' of Each Employee: Title VII's Prohibition on Sex Discrimination, The Legacy of Price Waterhouse V. Hopkins, and The Prospect of ENDS." *Stanford Law Review*. Vol 66, Issue 6. June 2014. 1333-1380.
- International Skating Union. *Technical Panel Handbook Single Skating*. 25 Jul 2014.  
[http://static.isu.org/media/166006/tphandbook\\_singleskating\\_2014-15.pdf](http://static.isu.org/media/166006/tphandbook_singleskating_2014-15.pdf) (参照2015-5-31)
- Jones, Abigail. "The Frozen Closet." *Newsweek*. 30 Jan. 2014.  
<http://www.newsweek.com/2014/01/31/frozen-closet-245138.html> (参照2014-12-3)
- Kestnbaum, E. *Culture on Ice: Figure Skating & Cultural Meaning*. Middletown: Wesleyan University Press, 2003.
- Klomsten, Anne Torhild; Marsh, Herb W; Skaalvik, Einar M. "Adolescents' Perceptions of Masculine and Feminine Values in Sport and Physical Education: A Study of Gender Differences" *Sex Roles*. 52.9-10. New York: 2005. 625-636.
- Kolb, Alexandra. "Nijinsky's Images of Homosexuality: Three Case Studies." *Journal of European Studies*. 39(2). London: Sage Publications Ltd., 2009. 147-171.
- Longman, J. "Inside the Rings; Struggling Weir Could End Up Long on Glitter but Short on Gold." *New York Times*. 19 Jan. 2010.  
<http://query.nytimes.com/gst/fullpage.html?res=9803E4D81139F93AA25752C0A9669D8B63> (参照2015-9-1)
- Lucyk, K. "Don't be Gay, Dude: How the Institution of Sport Reinforces Homophobia." *Constellations: An International Journal of Critical and Democratic Theory*, Vol.2, No.2, Hoboken: John Wiley & Sons Ltd., 2011. 66-80.
- Semerjian, T. Z., & Cohen, J. H. "FTM Means Female to Me: Transgender Athletes Performing Gender." *Women in Sport & Physical Activity Journal*, 15(2), Greensboro: University of North Carolina. 2006. 28-43.
- Salt Lake Olympic Committee. *The Fire Within: Salt Lake 2002 Olympic Winter Games*. 2002.
- Weir, Johnny. *Welcome to My World*. New York: Gallery Book, 2011.
- Whiteside, Kelly. "Sochi Olympics Will Test Gay Rights." *USA Today Sports*. 7 Feb 2013.  
<http://www.usatoday.com/story/sports/olympics/2013/02/06/russia-gay-rights-sochi-olympics/1897021/> (参照 2014-12-3)
- 石井達朗『異装のセクシュアリティ』新宿書房 2003年
- 小泉悠 (海外立法情報課)「【ロシア】ゲイ・プロパガンダ禁止法の成立」国立国会図書館調査及び立法考査局『外国の立法』No.256-2 2013年  
[http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo\\_8262622\\_po\\_02560207.pdf?contentNo=1](http://dl.ndl.go.jp/view/download/digidepo_8262622_po_02560207.pdf?contentNo=1) (参照 2015-5-1)
- セジウィック, イヴ・コゾフスキー『クローゼットの認識論—セクシュアリティの20世紀』青土社 1999年
- ソクタグ, スーザン 富山太佳夫訳『エイズとその隠喩』みすず書房 1990年
- 田村明子 「すばらしきアスリートたち」『ワールド・フィギュアスケート別冊 総特集=バンクーバー五輪フィギュア・スケート』新書館 2010年 32-48
- 田村明子 「ジョニー・ウィアー物語」『ワールド・フィギュアスケート別冊 総特集=ジョニー・ウィアー』新書館 2011年 48-65
- ドーヴァー, ケネス・中務哲郎・下田立行訳『古代ギリシャの同性愛』リポート 1984年
- 羽生結弦『蒼い炎』扶桑社 2012年
- フーコー, ミシェル 渡辺守章訳『知への意志 (性の歴史)』新潮社 1986年
- ランビエル, ステファン 翻訳者不明『ステファン・ランビエル』新書館 2011年

(Received:September 30,2015)

(Issued in internet Edition:November 1,2015)